



第7038号

2020年8月5日

コロナウイルス×7月豪雨

防災システム研究所所長 山村武彦

◆感染症との複合災害はリスクの掛け算

「コロナ×大災害」となると、電気、水道、ガスなどのインフラも断絶する。その結果、こまめな手洗いはできず、換気システムもダウンする。ましてや感染不安で避難所への避難をためらって逃げ遅れる危険性もある。こうした感染症との複合災害は災害の足し算ではない。物理的悪条件と、見えないウイルスへの心理要素が複雑に絡み合った掛け算災禍となる。

その複合災害が起きてしまった。令和2年7月豪雨(九州南部水害)である。複数の地元テレビ局から「被災地を見て孤立地区や被災者へのアドバイスを」と要請を受け、発災5日目に現地に入った。念のため、東京で抗体検査を受け陰性の診断書を持って出かけたが、当然それだけでは万全とは言えない。避難所や屋内の聞き取りを避け、移動中もソーシャルディスタンスを取るなど感染予防に留意しつつの3日間であった。

◆高齢者の「逃げる計画」より「逃げなくていい計画」

老人ホーム「千寿園」で14人の犠牲者を出すなど、甚大被害となった熊本県球磨村で衝撃を受けた。地上約7メートルの電線にぶら下がったガスボンベが、浸水の凄まじさを見せつけていた。自力避難できない高齢者を浸水想定区域の1階に寝かせていていいわけがない。これからは「逃げる計画」でなく「逃げなくてもいい計画」に切り替えるべきである。

隣接する人吉市も球磨川の氾濫は繰り返し経験してきた。そのため、以前から球磨川水害タイムライン(防災行動計画)を策定する等、防災先進地としても知られていた。前日に全職員を招集、午前4時に避難勧告を、特別警報後の5時15分には全市に避難指示を発令する。計画通りであれば、氾濫する前に危険区域の住民全てが避難を完了しているはずだった。

しかし、その時点で避難所へ避難した人は159人でしかない。住民からは「冠水していて避難したくてもできなかった」「コロナが怖くて実家に避難した」「避難所の3密が嫌だから近くの知人宅にいる」との声が聞かれた。思った以上に感染を恐れ避難所に行かず、結果的に分散避難した住民が多い。全国の市区町村は、3密回避や避難所増設など、今も懸命に避難所の感染予防対策を進めている。しかし、それがまだきちんと住民に伝わっていない。

◆マンパワー不足の中、地元高校生の心意気

今回の水害で、被災地支援に入った自治体職員の感染事例もあって、被災市町村はコロナ禍を懸念し、県内または市内在住に限定し災害ボランティアを募集。その結果、ニーズに対応できるマンパワーが集まっていない。このままだと、泥出しや片付けなどの応急復旧が大幅に遅れる可能性がある。支援職員と災害ボランティアに対するPCR検査体制や募集基準などは、全国からも支援できるように、国が明確なガイドラインを打ち出すべきである。

そんな中、地元高校生たちの自発的被災地支援が目をつけた。長靴・手袋・マスク着用で、猛暑下の作業は見ているだけでもきつい。それでも、汗と泥にまみれた熊本県立球磨工業高校の生徒たちの士気は高かった。「地元のピンチだから、できることは何でもしたい。だって今やらなければ、きっとあとで後悔するから」。思わず涙が出そうになった。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111 (代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003